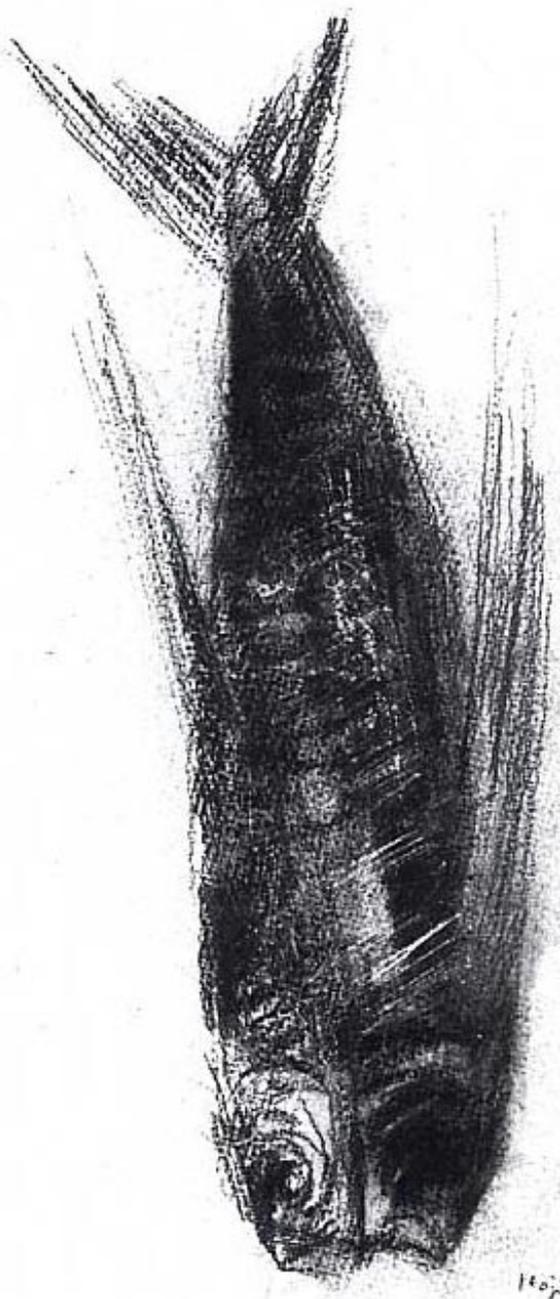


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻7月号(通巻532号)

風土



7

1407

農
曆
神
蔵
器

来六義園迎の雲を放てり朴の花

花楓六むくさの義たち館ちの礎い石し一つ

老鶯や藤代峠引き上ぐる

小満の妹山背山睦みあふ

藍布礼愛甕に藍の花咲く五月かな

ばら百花二百花妍けんを争はず

鎌倉街道左へ左へ牡丹咲く

牡丹の「黄冠」二輪雲におく

栃咲くや小学校に大手門

かがなべて日には十日やばら「宴」うたげ

おはぐろも形見八十八夜かな

燕来て書き込み多き農曆



竹間集

同人作品



雲雀

島谷 征良

歳月の闇へふたたび雛納む
沈丁や風とはならぬ気のうごき
善玉の見えぬいきさつ亀鳴けり
橋の上を人は往き来や鳥帰る
風寒うして草にゐる雲雀かな
桜草やたらに咲いて留守の家
夕冷えて花の下ゆく水のあり

春の水

大竹 淑子

養生の素顔を東風に晒しけり
木の芽山入りて両耳とほくなる
春の水寺の宝蔵裏流れ
いのちありて春の泉の水を呑む
咲き満ちて辛夷は宙に羽ばたけり
春落葉降る中にて眠れり
おぼろ夜や師の声ことに優しかり

初蛙

斉藤 小夜

手鏡は鎌倉彫や春の宵
のどけしや茶名俳名使ひ分け
春暁の竹ささやくをひとり聞く
花吹雪寺へ寄進の瓦積む
夫がゐてわれはゐてこそ春の宵
ききなれぬ鳥の声する春の屋
初蛙しばし憩ひてやくし茶屋

花巡り

— 山路 紀子 —

粟田口より花冷の京に入る
花筵六条河原に広げをり
高台院湖月尼枝垂桜かな
春深しねねの身丈に階の丈
囀や茶室をつなぐ土間廊下
花ふぶき吹き上げらるる音羽山
落花浴ぶ阿弓流為と妻母禮の墓
石垣の石塀小路や朧月
千年の都の夜の桜かな
桜どき西行出離の寺を訪ふ

得度して円位上人初桜
世の中を捨てて捨て得ぬ夢見草
小塩山麓の西行桜かな
西山の大竹藪も竹の秋
神大原野神社います社に千眼桜咲く
燕くる宇陀郡室生村大野
磨崖仏天衣の裾の芹青む
地に触るる枝垂桜や弥陀の前
母と子とその子と宇陀の野に遊ぶ
人麻呂阿騎野の東ひむがしの野のかぎろひぬ

山河集

同人作品



神蔵
器選

鯖街道程なく京や葱坊主
奥田 弦鬼
浅蜷 炊く老舗三軒佃島

ロンドン郊外

貴婦人のそぞろ歩きや蝶の昼
下掛けの水車の撥ねる春の水
春の滝透かせ柱状節理かな

布施まき子

一縷の雨枝垂桜を濡らしけり
校倉の宝蔵今に鳥交る
緑立つ二重橋前駅に降り
春の川引きあげてゐる空の青
露の花首たて関口芭蕉庵
種浸す農水池に鳩の声
物忘れいつより確か木の芽吹く

平田 安生

九十まで生きるつもり種おろす
あと戻りできぬ齡や田水張る
真言の空より鬱金桜咲く

生田恵美子

野の水を掬ふ手の窪風光る
耕して鮮しき風村裡に
転がして返すボールや春の暮
手を上げて一年生となりゆけり
桃の花耳たぶ大きい男来る

柿沼 罌子

裏門の広きを出づる桜東風
咲き満ちて花に重さのなかりけり
新緑の樹に一本の竹箒
瑠璃釉に中高に盛る木の芽和
風光る外野スタンド自由席

◇特別作品◇

夏紀行

直井たつろ

迷路めく地下道出でしわつと夏
碑に残る銀座の歴史街薄暑
風死せり人入れ替る夜の銀座
銀座裏に教会ありぬ桜桃忌
歩行者天国風鈴売りもゐて
暑き日や銀座にもある西東
歌舞伎出て少し奢りし鰻食ぶ
親柱残る京橋夏つばめ

雲の峰道の起点の日本橋
子宝ぬぬ児が撫でてゐる心太
堂涼し神馬の手綱猿が取り
大雷雨伽藍壊れん許りなり
鞍馬灯笼謂は知らず苔の花
夏暁の濁み声響く船溜り
由比ヶ浜稲村ヶ崎卯浪立つ
鎌倉の御首塚の薄暑かな
八重葎万治石仏異相にて
立膝の婆恐ろしき閻魔堂
風薫る行雲流水相模川
飯を食ふ事も億劫蒸暑し

風土集



神蔵器選

浮世絵の切手を剥がす日永かな

さいたま

竹生田勝次

文机に夕刊届く春の雷

花疲れエレベーターに詰められて

ふたひらの遅速の揃ふ落花かな

水飲みて喉の立ちたる落花かな

仏生会海は仏の手のごとし

伊東

稲葉ちよこ

絵本館に大人ばかりや山笑ふ

耳おとすサンドイツチや春の雷

春の宵パントマイムがギター弾く

ふさぎ虫飼ひならしをり春ごたつ

シユレツダーに入る原稿鳥帰る

東京

中嶋 陽子

三年のクラス名簿や風光る

新しき家具の配置図地虫出づ

樹の幹に八十八夜の樹々の声

草若葉保育器のある飼育小屋

逃水や容易く夫を渡すまじ

東京

奥田 茶々

縄飛びの片端結び大椽

欄干の湿りし夜の糸桜

夏近し時を刻みしトウシユーズ

黒板の猫の落書花の寺

遅き日や銅鑼打つて入る猪鍋屋

東京

遊橋恵美子

春惜しむ母と二夜を京にをり

四月馬鹿秘薬の効き目あらたかに

浄土浜

踏み鳴く石のしめりや春惜しむ

群れ易く散り難きかな蛸蚪の国

風光る羽田の第二ターミナル

東京

林 裕子

春眠は砂のくづるやうにかな

初燕 檢察庁の門くぐる

のどけしや鳥声絶えぬ門を掃く